寄嶺戀

人ゆゑにこゝろをしをる程(色と)ばかり見ば)峰のあらしも松(に)にやはふく(めやイ)

寄杜戀

なげきとも人やは聞(おも)かむ(ふイ)さばかりは神はことわる森の言の葉

寄關戀

ひたみちに賴むとならば關守もうちねぬる夜を先ゆるさなむ

寄岡戀

かきやるも散らばいかにと水莖の岡の木の葉におもふ秋かぜ

寄野戀

宮城野や風なき花もちる(露(ちりてイ))のはかなやたれを待つことにせむ

寄原戀

柏玉集第四句「うちねぬ夜半を」に作る、

柏玉集第三句「しく露の」に作る、

我がおもひあだちの原のいつかさて心にこもる程をしらせむ

寄河戀

一かたの思ひになさでみそぎ川など戀せじと身をたのむらむ

寄江戀

忘草おふるもしらず住の江やまつとばかりをなにたのむらむ

寄沼戀

かくれぬのあやめの枕をりにあへばそれも一夜の契やはなき

寄澤戀

なかぞらの煙よ人に見えざらば富士のなるさは音にたてゝも

寄池戀

さもこそはうきぬの池にとる草のかくみのかげもみごもりにして

柏玉集第三句「見えざるは」第五句「音にたてしも」に作る、

柏玉集第四句「など戀せじ」のに作る、

柏玉集下句「かくみのかげにみごもりとして」に作る、

寄瀧戀

戀に身も世をへておつる水上は知らずよいつのそでの瀧つ瀬

寄橋戀

歎きあかす枕ばかりやうき橋の夢のわたりをかけはなれてし

柏玉集第五句「かけ離なれても」に作る、

寄海戀

人よいかに蜑の千尋もみたびまでかはるを見むはあさき心を

柏玉集第二句「音につけても」に作る、

寄浦戀

浪こゆる音にもつけて松山のまつのうらかぜわれにはげしき

柏玉集第四句「まれにもきゝて」に作る、

寄濱戀

いまはそのたぐひもかなしうと濱のまれにもきてし天の羽衣

寄潟戀

波あらき名殘よいかにしほひがたいふかひなくてくだく心を

寄湊戀

柏玉集第四句「さても戀する」に作る、

なみまくら人にそふべきゆめもがなさてぞ戀するかけの湊に

寄島戀

柏玉集下句「我をばよその人のゆくへを」に作る、

しらじかし蓬が島のまぼろしもわれをぞよその人のゆくへは

曉寢覺

のこる夜を有明の月にまたや見む跡なき夢のまくらかはして

谷松年久

おろかなる谷のこゝろを種として年にかはらぬ松のことのは

籬竹

陰しげるいさゝむら竹木にもあらぬ草の籬にさだめてぞ見る

後柏原天皇

路苔

苔のうへに夜のひかりや思ふらむ松のほかげもしめる山路に

蘆間鶴

子をおもふ鶴の毛ごろもあしづゝのうすきやわぶる夜の浦風

羇中送日

ゆく〳〵も草木の色(に見)につゝ悲しきは野山にうつる(つりきて)しらぬ野山の月日をぞ知る(なりけりイ)

羇中憶都

見し人をおもひあはするうつゝもやうつの山邊の夢に悲しき

柏玉集脳「羇中憶都」第五句「夢ぞ悲しき」に作る、

旅泊重夜

かぢまくら袖こすなみも心よりほさでいく夜の月を見つらむ

海邊眺望

海ごしのやまもつゞかぬ遠島の木ずゑの夕日いるかげもなし

寄夢懐舊

としぐ〵に見るもやむかし春秋の花も一ときの夢をしたひて

寄老懐舊

よそに見し昔も戀し身のうへにことしは老(年イ)をかぞへはじめて

柏玉集第二句「昔も遠し」に作る、

寄世懐舊

我のみやその世ばかりの面影も古きにしたふもゝしきのうち

寄情述懐

いかにいはむあはれも知らぬ心には霞をへだて露をはらひて

寄涙述懐

われからのなみだよ何を思ふらむ藻にすむ蟲は浪もかけゝり(こそあれイ)

後柏原天皇

寄身述懐

いやしきも我にまさりて送る日をなすわざなくば身をいかにせむ

寄榊神祇

神わざや聲のなかにも榊葉のすゑ葉もとつ葉しげりあふまで

柏玉集第二句「聲のうちにも」に作る、

寄鏡神祇

身にちかき神のまもりのうれしきは鏡の影の手にもとるまで

柏玉集第三句「うれしさは」に作る、

寄水釋教

うかみ出づる世をばしらずて幾度か水の白波たちかへるらむ

寄灯釋教

ともし火の一夜のかげに百年の闇はあやなきものとなりぬる

祝言

我もなほあふぎてぞ見む（ふるイ）人ごとの心のみちにをさむべき（めしるイ）世を

五十首

春十首

色といへば春にも名にや立田姫かすみに染めぬ山の端もなし

春さむみそでのみぬれてたまらぬやかたみにくめる水の深芹

蹈分くる跡さだかにてかげろふのおのれと消えぬ雪間をぞ見る

うぐひすの聲をも待たじあくがるゝ春のこゝろは春ぞ誘はむ

ぬしやたれ追風ながら小簾の中のにほひをゆづる軒の梅が枝

露にほふ春の柳のまゆねかきみだれてあかぬ今朝のまを見む

かすみはてゝ夜ぶかき空になが めばや月より外にあくる光を

松の葉も眞木たつかげも春は見ず花の一木のみよしのゝやま

あやにくに今をこそ見め惜まれて散るさへ花の色香なりけり
うつろふと今朝見し露の色になほ夕ばえをしき庭のやまぶき

夏五首

夏きては卯の花山の夕づく夜こがくれおほきひかりともなし
ほのかにて聞きしをたどる時鳥いまの初音や去年のふるこゑ
晴間とはいふほどもなき五月雨の雲に見えすく月もめづらし
秋のいろにあはましものを夏草のなかにひらくる初花は惜し
下露のすゞしさしらで殘る日のこずゑをたかみ蟬の鳴くこゑ

秋十首

夜のまにはおくらむ草の露もなしまた秋かぜに朝すゞみして
まれにあふ星のちぎりをうきことに思ひそめぬる秋の空かな

吹くたびの風におきふす荻の葉のおとなしとても哀とや見む
かたよりに秋とはいはじ萩が花尾花もおなじ野邊にこそ見め
思ふかたと聞く人さぞなさらでしも待ちつけがほの初鴈の聲
いろ〳〵の蟲の音きかば秋きての庭をば草にやつしても見む
よそよりも月はうへなき姨捨やふもとばかりの影をだに見む
海原やとゞこほりなき浪のうへの月は空ゆくものとしも見ず
霜にひゞき風にこたへてまぢかきや遠山がつのころもうつ聲
もゝぐさの花咲く野守われのみと紅葉の山やいひくらすらむ

冬五首

木の葉ちるあらしのあとの山陰は水のひゞきぞ奥ふかきかな
こゝろある寢覺よいかにみやこにも近き河原に千鳥鳴く夜を

たえず行く心をしりていな鳥のあすかの川はこほる瀬やなき
みだれちる霰にしらむ閨の中やよるのひかりの玉をなすらむ
たが宿も跡つけがたき今朝のまやあらぬ野山の雪をとふらむ

戀十首

はてよいかに人やりならぬ戀路とて立ち歸るべき心とはなし
人にうきこゝろも知らず忍ぶ身のなみだを袖に恨みそめぬる
われのみは神南備山の秋のいろかはらじものと思ひかけてき
とはずとも恨はあらじ今よりはたのめぬ暮を待ちてこそ見め
いらへこそさも聞かざらめいひよればうちもみじろぐ氣色だになき
いひいでゝ後は夢にもまぎれじを唯今のまのうつゝともなき
明けやらぬ槇の戸口のいでがてにやすらふ程を月や待つらむ

人ぞなほ心も知らぬ鳥が音になみだくらべてあかぬわかれを
さりともと思ひのどめしうきふしの同じさまにてそふ恨かな
今見るもなみだのかゝる墨つきはふりぬる筆の跡としもなし

雜十首

神祇

しるしらずすむ世はおなじ石清水わが人ならぬ人ももらすな

釋教

胸のうちにすまむもさぞな秋の空月は霧をもへだてざりけり
まよふ身もなげかじ末の法の師は傳ふるまゝの道やなからむ

無常

塵の身ぞゆくへも知らぬ風ふけば下葉にのこる草の上のつゆ

別

おくれじと慕ひし人はとゞめおきて友なき道を誰にかこたむ

旅

こゝろなほくるしきものと波風の今日の舟路におもふ山ごえ

一夜こそよしやゐな野のさゝまくらなほ秋霧に道やまどはむ

祝

おのづから千とせのかげを友鶴のよはひや松をしる人にせむ

物名（だいばむ・たかつき）

春ながら雪をや冬とまたいはむしたかつきえて殘るまゝなる

述懐

うき事を誰かまさると世をばたゞひとりぐ〜の上にこそ見め

三十首

早春霞

峰の雪のこるやいづこ春きては四方のあらしも空にかすめる

澤春草

うちわたすかげすむ水の澤のべに蹈むあとをしき露の下ぐさ

曉梅

明けやすき春の夜ながらいくたびの寢覺（のまくらイ）になして梅匂ふらむ

花滿山

うきてゆくたぐひにはあらで白雲のこりしく山は花ざかりかも

江上暮春

ゆく春は波路さはらで暮れぬらむあしわけ舟のおなじ入江に

溪卯花

谷ふかみ咲くや卯の花かひもなしたゞ埋木のおなじたぐひに

野郭公

分けきつる裾野の露のぬれぎぬも誰が爲かきし山ほとゝぎす

雨後鵜河

うかひぶね五月の雨もはるゝ夜の星か川邊のかゞり火のかげ

月前荻

秋と吹くかぜきく軒のした荻は月のくまなるかげとしもなし

夕蟲

しめゆひて聞かましものを淺茅原夕日がくれの蟲のこゑ〳〵

海邊鹿

逢ふことのたえたる峰か明石がた妻とふ鹿のうらみあるこゑ

閑庭薄

くれごとにかごとがましき露やおく宿は尾花が袖にまかせて

名所擣衣

たかまどの野邊のにしきの花の色もうつろふ秋にうつ衣かな

朝寒蘆

波風のこほるみぎはのあしの葉も朝露さやぐおともさむけし

深夜千鳥

聞く人のまたいづくにか友千鳥おなじ寢覺のそらにかよひて

故郷雪

とひきては故郷人のこのすまひ斧の柄くたすゆきのうちかな

聞聲戀

さしてそのきゝしもあやな瑞垣の久しきよりの思ひなりとは

稀戀

流石また絶えぬ物故我中のつらきながらのまたずしもあらず

增戀

おもひのみせく方ぞなき妹背山おちそふ瀧のよどはありとも

怨戀

あぢきなくとすれば恨み言の葉を思ひしこづり慕ひしもせず

被忘戀

われさへに言の葉をだに忘れめやこゝろは人の秋にあふとも

旅行

すゑいそぐ旅にしあればから衣はるかにこゆる山路ともなし

旅宿

かりまくら嵐にさめて都おもふ夢よりのちの夜こそながけれ

旅泊

舟とめていかにあかさむ松の風みぎはの浪もあらきいそべに

山家松

山にての友とはこれぞ松かぜを聞きけむ人のおなじこゝろに

山家橋

山里のゆきゝにわたすこの橋もなほ世にかよふ道と見えつゝ

山家苔

あはれいかに又しくものも嵐ふく苔のむしろの塵はらひつゝ

寄神祇祝

しきしまの道もかしこしこのたびの手向にあける神に任せむ

寄水懐舊

たちかへり水のみなわのうたかたもしのぶは昔今やなになる

寄雲述懐

あふぎ見ば何かむなしき空の雲みてるねがひを世の爲にして

三十首明應五年九月十六日庚申　合點姉小路宰相

江上霞

蘆の葉にまだ春かぜは音なくてみしま江ふかくかすむ波かな

野殘雪

富士のねにつもるはさぞな武藏野の雪間は春に限りこそあれ

依風知梅

梅が香を風のやどりと思ふにはゆきて恨みむ我が身ともなし

柳靡風

むすびとむる露はなくともあかず見む柳が枝の風のすがたを

春曉月

今鳴くもそらねの鳥か月はなほかすみはてたる空ぞ夜ぶかき

花似雲

まださかぬ花をあしたの雲に見てこれも跡なき夢のうちかな

落花如雪

まがへども花とは見えで散る雪の木の本ばかりつもる庭かな

雲間郭公

後柏原天皇

村雨の雲のたえまに鳴きいでゝ月にあらそふほとゝぎすかな

沼菖蒲

かくれぬの水の心やあやめ草あやめもわかずうもれゆくらむ

晩夏螢

夏は早くれはてぬるをおほかたの夜をいそぎてや螢とぶらむ

故郷秋夕

うきことも露けき袖もふるさとは秋にかぎらぬ秋のゆふぐれ

深夜蟲

とこなれて鳴きよる蟲の聲きけば獨あかさぬ夜こそふけぬれ

嶺初鴈

かさゝぎをおのが友とや誘ふらむ峰とびこえてわたる鴈がね

行路月

たが門とさしてはとはず道のべや月をやどりにゆきかへりつゝ

旅泊月

波枕うきねならずばとばかりにおもひたゆたふ月を見るかな

秋山田

小男鹿のわがゐる山はなか〳〵に小田もる人をおどろかすらむ

杜紅葉

人もその千枝のもみぢ葉うすくこき信太の杜は綵にうつさなむ

時雨告冬

見るまゝに今朝は冬をや誘ふらむ秋もしぐれし雲のかへしに

浦千鳥

後柏原天皇

友なしとなくや千鳥も志賀の浦やとほき都のあとしたふらむ

歳暮深雪

くれてゆく年木きるべき道もなし深山のゆきに冬ごもりして

寄露戀

心よりあまるおもひの露ならば袖にもいかでつゝみはつべき

寄草戀

露けくもながめいだしてわが宿の夕かげ草にたれを待つらむ

寄水戀

かねてよりあさき心をくみしらで今さらうしやわすれ井の水

寄舟戀

うき中にいつの月日か待ちも見むもろこし舟はゆきかへるとも

寄筵戀

一本に據て補ふ、〔我だにもいぶせき夜半のすがむしろ露けき床はとふ人もなし〕

山松

嶺たかき松の落葉やおのづからふもとの塵とまたつもるらむ

野篠

一本に據て補ふ、〔風の音も一むらたかしはるかなる芝生につゞく野邊のさゝ原〕

草庵

朽行くもあるに任せつ草の庵は結びかへむもやすからむ身に

古寺嵐

霜よりも峰のあらしをひゞきにて鐘さだかなるあかつきの寺（空イ）

寄天祝

後柏原天皇

てらす日もくだれる雨もをり〳〵のねがひみちぬる久方の空

三十首　聖廟法樂大永四年甲申十二月日

早春霞

いつのまに春のひかりの朝がすみ雪みぞれせしおなじ空かは

澤春草

雪やまたふる草まじる野べのいろ澤邊のあしの下根とけても

曉梅

梅が香におどろかされて見し程の夢もくやしき寢覺とぞなる

花滿山

いづくにか槇たつかげもみよしのゝ吉野は花にあさき山かな

江上暮春

波風のなご江の春のかへるさをしたふ道にぞたづも鳴くなる

谷卯花

おそざくらひとりと見れば卯の花も咲きそふ谷の心かはして

野時鳥

ほと〳〵ぎす秋鳴く鴈にさきだちてなみだおとしつ野邊の夕露

雨後鵜川

鵜飼舟こぎ出でけりなおほゐ川木しげきかげに雨はのこりて

月前荻

風わたる軒のした荻おきふしのかげある月は晴れくもりつゝ

夕蟲

あはれいかに夕霜まよふ秋の日にひかりにあまるむしの聲々

柏玉集第四句「咲きそふ花の」に作る、

柏玉集第二句「こぎ出にけりな」に作る、

柏玉集第二第三句「夕露まよふ秋の日の」に作る、

海邊鹿

妻戀のうらみやふかき海ならむつれなくたてる鹿の鳴くには

閑庭薄

宿からの淋しさのみや秋といはむ尾花が末はとにもかくにも

名所擣衣

難波人すむてふあしの八重ぶきにかさねぬ衣うちわびぬとや

朝寒蘆

朝な〳〵霜にとぢたる蘆の葉のなびくは水にこほりそひつゝ

柏玉集第五句「こほりそへつゝ」に作る、

深夜千鳥

まぎれなく聞く空にこそ友千鳥夜もふけゆけば月出でぬべし

故郷雪

おもひわびぬ故郷人の雪のうちとひきて後のみすてがたきを

聞聲戀

聞けばとて遠山彦はかひもあらじわがいふことの答ならずば

稀戀

あぢきなやよその夜がれと思はずばうとくてとふも頼みこそせめ

增戀

日にそへて戀の亂れぞはてしらぬ我が玉の緒のたえし物ゆゑ

柏玉集甌「恨」に作る、

怨戀

思へかし恨をおへるはて〳〵のやすからぬ身はおのが爲ぞと

被忘戀

おなじ世にふるの神杉すぎこしをよしや忘れぬ我ぞつれなき

後柏原天皇

旅行

友なくてたびには行かむかりそめも逢ふ人あれば別路もうし

旅宿

草まくら結べばむすぶ露を見て夢をいかにとしたひわびぬる

旅泊

白浪の立田路いかにおほとものみつのとまりの浮寝ながらに

山家松

朝夕のけぶりもたてじ柴のいほ松の葉すぎてあるにまかせむ

山家橋

山ふかみ道なきまゝにうちわたす橋はいづくの岩木なるらむ

山家苔

かげたかき草木はいはじ山里は苔のしづくをはらひえぬまで

寄神祇祝

見るまゝに筆もとりあへず手向山この言の葉も神のまに〳〵

寄水懐舊

水もその濁らばといひすめらばと思ふも人の世にぞしたがふ

寄雲述懐

いかにせば月日をおなじ心にて雲のうへより世をてらさまし

雑二十首

暁鶏

鳴く鳥の八聲のかずもつもりゆく老のねざめに誰か聞くらむ

夜燈

さよ風の窓のすきまに吹き入りて靜にも見ぬともし火のかげ

嶺松

嶺たかくみどりの空に出づる日もみさをの松の上に見ゆらむ

里竹

かげしげき軒端の竹の夜はなかく暮るゝは早き里のひとかた

磯巖

みつ潮にいはほ殘らずこす涙のしづくやしばし磯つたふらむ

島鶴

をぐろ崎みつの小島の夕なみに聲そふ田鶴もこゝろあるらし

岡篠

松の葉のたぐひに見えて露霜のをかべのをざゝ冬がれもなし

江葦

風さむみなほ枯れたてる葦の葉や入江の波に折れかへるらむ

浦船

朝な〳〵おのがうら〳〵漕ぎ出でゝいとまも波のあまの釣舟

杣山

山に入る道とは見れど世の中のうきにはこりぬ杣木ひくらし

岸苔

河ぎしや苔のみだれてよる浪にことぐさよりも露はかわかじ

山家水

おとたかき瀧だにあるを山ざとはかけひの水の軒に落ちつゝ

山家嵐

塵の世のほかなるものを山里のあらしは何をまたはらふらむ

田家雨

くれやすき秋の日影もをしねほす賤が假庵のまたしぐれつゝ

旅行

峰たかくのぼりて見れば故郷もまだあしもとにちかき道かな

旅宿

いかにして夢はむすばむ草まくら苦のむしろの露ふかき夜に

旅泊

するいそぐ舟出に待ちし追風もよるは(のイ)夢路をよきて吹かなむ

海眺望

波のうへもゆくすゑ見えてみつ汐のひがたにちかき浦の遠島

寄社祝

四方八隅をさまる道はへだてなく千々のやしろの神ぞ守らむ

寄日祝

この國の外にもしるかめぐる日の光に見えてくもりなき代は

十二首

山

立ちならぶ木々の木末もしげ山のいづれを杉の青葉(しるしイ)ともなし

河

名にしおふいづくはあれどいづみ河水の心やきよくすむらむ

野

見し秋はところせきまでわけきつる花も枯野の跡ぞさびしき

後柏原天皇

關

おのづからねられむものか浪風もまくらに馴るゝ須磨の關守

橋

かつらぎの神代もとほくわたしきて今も朽ちせぬ久米の岩橋

山家

世の中はうかりし物と思ふにぞかゝる深山もすみよかりける

田家

冬きては山田のかりほかりにだにとはれぬ道ぞ霜にうもるゝ

海路

こぎいでゝ我はかぎりも涙の上にいづくまでとかいそぐ舟人

別

かへるべき日數をちぎる別路のさていかならむゆくすゑの空

旅

昨日より今日は馴れぬる心とやさのみうからぬ旅のゆくすゑ

夢

心よりおもひねに見る夢ながらさむるかぎりぞ我にまかせぬ

懷舊

こしかたをおもふにつけて月も日もつもれば老の心をぞ知る

十首

雪中若菜

春きてもひまなき雪の下もえに見えぬ若菜は摘みのこしつゝ

若菜つむ袖をもはらへおのづから雪ふきちらす野邊の春かぜ

萌え出づる色をも見せず春さむみ野邊の若菜は雪やつむらむ

折花

しをるゝも散るもをしとて花はたゞ盛の色を手折りてぞ見る
あかずとて折りける花よ色も香も知る人がほに我や見えなむ
あかず思ふこゝろよいかに一枝も手折るは花をちらす色かな

待郭公

ほとゝぎすたゞ一聲もおそき夜にゆふつけ鳥を數へてぞ聞く
待つ夜をもよそにへだてゝほとゝぎす遠山鳥にあかす比かな
時鳥いまぞ夢にとおもひねも待ちふけぬるにかひやなからむ

秋夕

うきものと心をつくるゆふべより秋はむなしき空としもなし

身ひとつに猶うきものかいにしへもかくやは人の秋の夕ぐれ
袖にのみ何はらふらむうしとおもふこゝろよりおく秋の夕露

海月

行きて見ぬ浦のはつしま面影にありとやいはむ月ぞさやけき
見ずやいかに蜑の苫屋の秋風に月は身にしむひかりありとも
伊勢島や汐干の月もくもるらむいふかひもなき蜑のみるめは

風前落葉

露かわく風の木の葉のゆくへまでおきどころなくまがふ色哉
吹く風も山めぐりして誘ふらむしぐれし程の木の葉つくして
秋の蟬の鳴きふるしてし木末にも風の木の葉の聲ぞしぐるゝ

寄雲戀

霞とも霧とも雲をいひなしの名ぞ立ちやすきまことならねど
同じ世に隔ててはてける身のうさや八重たつ雲の山にまがへむ
思ひやる雲居はおなじなぐさめにかすめし宿ぞ見る心ちする

寄埋木戀

つれなしや谷のうもれ木かくてしもふかきおもひよ殘る命よ
なほざりの言の葉もがな埋木のもとの根ざしを忘れはてずば
あぢきなく岩にぞかふる埋木も草のみだれて見えぬこゝろは

窓燈

枝の雪もならさでくらき窓のうちは消えぬもをしきよるの燈
窓ごしのさよ風ふけてともし火のまたゝくかげを靜にぞ見る
あけくれはよるの色とや消えがたの光そひゆく窓のともし火

旅泊

都おもふ涙ならずばとまり舟まくらうくともおどろかれじを
あけやらぬ夜は栲繩の千ひろともおもふうきねにたへぬ心よ
なぐさめておもふもかなし波枕なればさすがに夢も見ゆやと

十首

天象

四方八隅世におほふ空のめぐみをや外なき物と誰もうくらし
こゝにうつす緑の色やすみのかげすめるを天つ空と見すらむ

地儀

志賀の浦やかへる波にもさそはれぬ心ぞ山のうへに名だかき
志賀の浦や比良山風に見わたせば潮ならぬ波ぞ沖にみちける

柏玉集第二句「比良の山風」第五句「沖とみちくる」に作る、

居所

あしびきの山ざくら戸の冬ごもりたゝく嵐はたれに待たれて
とのづくりあらぬ家居のかず〳〵はむべもとみけり九重の内

草

今は身もこゝろを種とあかつきのめざまし草の老ぞちかづく
ひかりある言の葉もがな百ぐさのかずに入りぬる磯の玉藻に

木

たまつばき春と秋との八千世をば花にぞちぎる紅葉をば見じ
物ごとにかくてぞ見まし世の中を常磐の松のおのがすがたに

鳥

うらやまし鳥すらむばらからたちのさかしき世にはすむ習かは

柏玉集第三第四句「八千代をも花にもちぎる」に作る、

柏玉集第五句「すまむともせず」に作る、

池をあさみ氷がさねは一重にてうへに色こき鴛鴦の毛ごろも

獸

題ありて歌闕く、

蟲

もろ人のたちぬふきぬの上に見て民のかふこも眉ひらくなり
一とせに知らぬたぐひも蟲といへば秋鳴くのみに心とゞめて

釋教

たのもしな我世をてらすしるしをば夢にも峯の三のともし火
法の道わかの道□もうらおもてなき

神祇

題ありて歌闕く、

後柏原天皇

十首

江霞

松かぜにおとをのこして住の江や波のいづくもかすむ色かな（春イ）

花作友

花はたゞうつろひゆくも友と見し春やまたこむ春にかはらじ（花は／もイ／春イ／るイ）

郭公稀

鳴けよ猶山ほとゝぎす年ごとに稀ならぬ音もあだに聞かめや

草花

秋風になびくはおなじ千ぐさにもわきて名にたつ女郎花かな

夕出月

名殘なき入日のそらの雲間よりあとをしたひて出づる月かな

氷不解

舟もなき谷の小河はそのまゝにこほりをくだく人もあらじな

後朝戀

おきいでし又寢の床に見る夢のさめてやいとゞもの思ふらむ

久戀

つれなさをしたふ心は年へてもつらきにつけて忘れやはする

田家

わづかなる田面の庵のあれまくも惜しとはよそに誰か見るべき

獨述懷

和歌の浦やかゝる便を待ちえてもなみならぬ身をかこつはかなさ

六首

後柏原天皇

春

咲かぬまの陰よりなれし花にこそくはゝる春の程も知らるれ

春きては柳さくらのにしきこそ秋のもみぢのいろもおよばね

夏

ほとゝぎすおのが名に鳴く一聲やさだかならぬもわきて聞くらむ

秋

いかばかりすみゆく空ぞ夕ぐれの星のひかりも月に消えつゝ

うき雲もおよばぬ山のをのへより猶そらたかくすめる月かな

冬

通路はうづみもはてぬ今朝のまは雪も友まつこゝろなるらし

ふりそめてうづみもはてぬ今朝のまは雪も友まつ庭の面かな

戀

人はかく思はぬ中のいのちもて戀にすてなむ身こそやすけれ

雜

およばじの麓の塵もかず〳〵につもれるはてや大和ことの葉

〔以上後柏原院御百首〕

山中紅葉

わけ入れば山のもみぢの色も今なほおくふかき霧のうちかな

田家秋寒

もりあかす山田の庵に露霜の夜さむやしづをおどろかすらむ

鶴伴仙齡

仙人にともなふ鶴もきみが經む千世を雲居にまづちぎるらし

〔以上文明十四年九月二十八日詩歌合〕

後柏原天皇

雪中鶯

木々はいま花かと見えて降る雪に初音やはやき春のうぐひす

江畔柳

影しあればつなぐ小舟のおなじ江になびく綱手や青柳のいと

〔以上文明十五年正月十三日詩歌合〕

樹陰夏月

蟬のこゑしぐれし跡に待ち出でゝ木の葉色づく月ぞもりくる

水邊納涼

瀧の音は山かぜながらはげしくてうち散る程の波ぞすゞしき

寄道祝言

かくてしも我が世は經なむふりにける人に正しき道を殘して

不知名戀

蜑の子のなのりもよしや今よりは我によるべの宿をさだめば

立門空曙戀

とひこしを空に答へてあくる夜は門たがへにや思ひなしけむ

觸事思出戀

夢にても又いかならむ世にかはと忘れぬのみのこと草もうし

悦僞言戀

かばかりのとだえもうれし僞の言の葉ながらなぐさめにして

旅宿馴戀

かりそめの夢もいく夜のくさまくら故郷人にいかゞかたらむ

〔以上文龜三年六月十四日三十六番歌合〕

見僞書慰戀

待ちえてはうたがはで見む一筆の人に墨つくためしなりとも

〔以上大永二年八月四日御會懸五十首〕

春

今日にあけて春とや霞む玉すだれ雪にむかひし山もはるかに

一とせの鳥の初音に鳴きそめてわれはがほなる春のうぐひす

峰たかみ去年のふる雪おもひいで〻花をぞたどる今朝の春風

鳥の音におどろかされて柴の戸の花も咲きそふ春をしるかな

うらやまし花は久しきさかりかなよ〻の春風吹きつたへつ〻

瀧の絲のみだりに風の吹きくるや花のしらかはせく方もなき

咲く藤にやまほと〻ぎすいつかとも心のまつは春にしられじ

柏玉集題「山早春」第五句「山ものどかに」に作る、

夏

いかに聞きいかに見てまし時鳥そらゆく月のゆふぐれのこゑ

にほへなほ花たちばなの我身さへよ〻のかずとてしのぶ昔を

夕やみの庭のかゞり火たきけちて木蔭すゞしく月になりぬる

秋

よそにこそへだてもあらめおのづから我見る月は雲の上にて

出で入りの山ある月のゆくへとはさても思はめなかぞらの影

雲にほふあかつき月にもれ出でゝひとりくまなき鐘の音かな

秋よいかにいはほの中も今更に世のうきことを鹿ぞ啼くなる

山ふかみ霧わけ出でむ歸るさも暮れはてけりなひぐらしの聲

今はわれ藐姑射のやまの秋の菊うつろふ花のをりを知らなむ

花に見し春のにしきの中たえてもみぢの秋にうつるいろかな

冬

水の上に散りやはとまる枝ながら木の葉にかけよ風のしがらみ

月なれや夕川わたりほどもなくこほりをしける水のさむけさ

こゝろまで雪にぞなびくすゞしさの夏こそと見し竹のした風

戀

こゝろよりあまる涙をせく袖のまたふたしへに憂き思ひかな

見はてぬを思へばおなじ關守の知らぬ夢路のすゑもとほらず

取出でゝ文をぞ見つるいとせめて戀しき時のともし火のもと

思ひやるこゝろにたえむ山路かは日ごろの雨の雲間なくとも

おもへども限ある夜のしのゝめに(をイ)人にしたはむ言の葉もなし

かはらじと猶たのめとや松山のあだし波をば見ずしらずして

逢はずばと思ひながらも片絲のたえむとまでは恨みざりしを

雜

散る花ももろき木の葉もかくて見む深山の嵐ふくにまかせて

吹きのぼる谷風見えてはつせ山ゆふべのかねに雲のかゝれる

旅にしてしのぶ草生ふる故郷は住むらむよりも亂れてぞ思ふ

旅枕馴れぬるまゝにねぬる夜のうらめづらしき夢のかよひぢ

世の中よ夢路に過ぎて宇津の山ゆくさき知らぬ物をこそ思へ

かなしきは心にうかぶおもかげのまだ見ぬ人ぞ月にまぎれぬ

我身とてそれもこゝろのまゝならぬこの世に人の怨あらめや

世をうらみあるは我身を憂しと思ふ人にいつかは心やすめむ

諸人の千年のよはひかさねてや鶴の毛ごろも世におほふらむ

〔以上大永六年内裏御屏風上帖〕

春のころ鶯の聲をきかせたまひて

のどけさを春のしらべにうぐひすのたが心より初音なくらむ

月のころ人々に歌めされけるついでに

月のすむ同じ雲居の身をしればこゝろのくまや人に見ゆらむ

旅のこゝろを

暮れぬともとまりはこゝぞ隅田川鳥をみやこの知る人にして

述懐のこゝろを

ほど〳〵に思ふこととなき世とや見む上もめぐまず下も靡かで

永正五年の春春日社造營ありて遷宮行はれしとき

みしめ繩ながき世かけて言の葉の道は絶えせぬ手向なるらむ

後土御門院かくれさせ給ひて御はてのわざ行はせ

給ひけるとき阿彌陀の御名を上におきてよませた

まふとて

ながむれば千々の思もなにならでこの一きはを月はしるらむ

むら雲のはれくもる月のしばしだに光隱るゝおもひやはなき

あけぬ夜の夢のうちよりめぐりきぬ去年見し月のいまの面影

身をしればなべての秋のなみだかはいかにやどさむ袖の月影

玉のうてな蓮の上にすみかへてとことはにこそ月も見るらめ

ふたよまで名だかき秋の月も見つそのよの光世にのこさばや

永正十三年八月後土御門院の十七年の御法事おこ

後柏原天皇

なはせ給ひけるとき内にて御法事のありさまはる
かにおぼしやらせ給ひて
法の道は心のうちにつとめなむ菜つみ水くむわざならずとも
えにしあれば法の筵にしきしまのみちのひかりも佛ならずや

【以上池の藻屑】

歴代御製集巻十五終

歴代御製集巻十六

後奈良天皇

暁立春

おのづから春たつ空も知らるゝやこの夜あけゆく鳥の初こゑ

溪餘寒

つもるとも春はとおもふ雪もよになほさえくらす谷の下かぜ

檜原霞

吹きわくる峰の檜原の朝がすみ晴れてあらしや又くもるらむ

杜霞

里までもとおもふも遠し見わたせばかすむ生田の森の下みち

名所鶯

うぐひすの聲するみちにうちいでゝあけくれたどる逢坂の山

若菜

うちむれて若菜摘むなり都とてはやくも野邊の雪は消えねど

草漸青

むすべどもみどりそひゆく若草のねたくや春の霜は消ゆらむ

里梅

春かぜも人をぞわかむとはでゆく袖にもをしきやどの梅が香

門柳

舟つなぐたよりもあるかわたしもり我が門ちかき青柳のかげ

初花

待たれつゝ早くも咲くと櫻花散らずもあれや惜しみやはせぬ

朝花

ひかりある花のこずゑの朝霞うつろはむとも見えぬいろかな

峰花

見つゝゆくよし野は山のおくもなし峰もふもとも花に忘れて

島花

人住まぬおきつ島にも咲く花のかげこそあるじ舟やとめまし

殘花

いざ櫻我もといはぬ身の憂さもよしやしばしと花ぞのこれる

殘春月

さす潮のみつの濱風よるくとふけたる月ぞなみにかすめる

湖歸隔

隔かへる志賀のうらなみ末かけて思ふもとほしみこしぢの空

松藤

底きよく色香にすめるいけみづや藤さく松のかげを知るらむ

苗代

苗まくや鳥おふ聲もをちこちにみづせきかけてかへす荒小田

折歛冬

一枝は手折りてゆかむやまぶきの花はうつろふ色あさくとも

暮春

花散りて春はかぎりと思ひしにのこる日數のくるゝしも憂し

遲櫻

夏まではこゝろありける色□かな春はなべての花とこそ見め

岸卯花

卯の花の咲ける岸かげ水もなしいかなる波のかけて行くらむ

待郭公

しのぶべきたれゆゑまでも時鳥まつ人ごとにつれなかるらむ

海時鳥

そことなきよるの舟路の時鳥鳴く音に明けてやまも見えけり

遠時鳥

入る月もおなじ雲間のほとゝぎす山のあなたの誰をとふらむ

瞿麥

誰がそでにゆるす色とも手折らましくれなゐうすき瞿麥の花

岡邊早苗

うゑわたす田の面の末は野をかけて岡邊の里に早苗とるなり

樹陰照射

ともしたて歸るますらを木隱にしるべばかりの月はもるらむ

五月雨

五月雨はかびやが下も水こえて雲ぞけぶりにたちかはりたる

鵜川

かゞり火の猶とほざかる鵜飼舟いま一瀬とやさしのぼるらむ

簷橘

月も猶おなじむかしともりくるや花たちばなのかをる軒端に

旅夕立

このまゝにほさでやねなむ旅衣日もゆふだちの雲のしたみち

野螢

けぶりにてたつ蚊の聲も遠ざかる野邊の螢のなにともゆらむ

納涼

ふみわけてこの里人やすゞむらむしげりおくるゝ山のかげ草

六月祓

今年はやけふをなかばのみそぎ河我が齡ともおもはましかば

早秋

うちなびく小田のさなへの一穗にも秋を見せたる今朝の初風

七夕別

うすくなる光もかなし七夕のわかれにちかきあけがたのそら

萩風

染めてみむ色をも待たで萩が枝の下葉のつゆをはらふ秋かぜ

籬萩

萩の葉におとするほどや吹かざらむまがきあらさぬ庭の夕風

行路薄

行く人のたちもかへらず花薄しひてはなにとなほまねくらむ

田上鴈

おくれけむ雲路はいづく鴈の鳴くおなじ田面に落つる一つら

外山鹿

あはれをも憂きをも知らじ牡鹿なく外山の里の秋をとはずば

原露

吹きしをる袖の秋かぜ身にしみて夕つゆわくる那須のしの原

夜蟲

長しとも思ひわかでやきり〳〵す秋の夜をしも鳴き明すらむ

渡霧

舟よばふ里はむかひにとほからでなみまへだつる淀の川ぎり

駒迎

名にしおふこよひのかげも望月の駒ひきこゆるあづまぢの山

關月

波かぜのうきねなりとも清見がた關路の月はたれか見ざらむ

竹間月

なびきあふ竹のさえだにもる月の影さだまらぬ秋かぜぞ吹く

浦月

こゝろすむあかしの浦の月にこそこの山里もとはまほしけれ

古宅月

ふりはてゝしげき板間の月も見つ憂き住ひとや人はいふらむ

浪月

雲もなき空にすめるはしづかにて波間の月やかげさわぐらむ

擣衣

うちたゆむあしやの里のあさ衣しのにをりはへ今やほすらむ

秋時雨

晴れやらぬ雲はしぐれをこゝろにてふりみ降らずみ秋寒き空

紅葉

もみぢがり時雨を袖につくすかなこゝろに秋の色をふかめて

九月盡

暫しともいはで別るゝ秋よなどゆくへをだにも知らせやはせぬ

初冬

秋もこそ［　　］けめ冬のきてあらはに見ゆる野邊の色哉

瀧落葉

このごろは散れる紅葉のくれなゐに染めてぞさらす布引の瀧

庭霜

霜むすぶ岩根のをざゝうちそよぎ音すさまじき庭のやりみづ

柴霰

袖さむみ眞柴をひろふ山がつは玉ともしらで散るあられかな

嶺雪

大比枝や横河のみねをさしてこそ浦こぐふねも雪は見つらめ

杉雪

人とはぬしるしなりけり山ざとの雪にあとなきすぎのした道

杜雪

さそひくる雪はこずゑにつもりけりもみぢは散りし木枯の杜

枯葦

蜑人やこれも爪木ともとめけむ霜のかれ葉のあし火たくかげ

杣寒月

中絶えて月もかひなし杣川のこほりのうへをくだすいかだし

磯千鳥

ともなひてたつや磯邊のさよ千鳥波のうきねを同じこゝろに

冬暁

さびしさに鳥の空音もかこつまで猶あけやらぬ冬の夜なかさ

河氷

こし汐の下にこほれるみなとがは水をへだてゝ浪や行くらむ

鷹狩

鳥立するをのへをとほみこゑたてゝ駒をはやむる野邊の狩人

澤水鳥

何をそのおもふことゝて澤水にうかべる鳥のこゑかはすらむ

歳暮

つもりては老となりぬる哀をも知らでや年のくれてゆくらむ

以下三首題ぁりて歌闕く、

不逢戀

契たえはかなからじとつれなくば思ひしるまで身をや盡さむ

切戀

惜しとおもふ命もかろし何を身のくるしき戀と人に知らせむ

遠戀

はる〴〵とわけこし道のわりなさも思ひしらずば宇治の里人

近戀

たちなれてつらきけしきを見るも憂し戀しくてこそ思ひ暮さめ

別戀

あはざらばかゝる別もなからまし戀ぞ報いのたゞぢなりける

閑居長

忍戀

片戀

貧戀

我が爲にこはたの里の馬もがな人のかち路におくるゝもうき

逢夢戀

おもひねに必かよふゆめもなし人やゆるしてあふと見つらむ

後朝戀

しらず猶露のしづくの殘るかな思ひきえにしきぬ〴〵のあと

聞戀

聞くのみはあやめもわかずあやめ草ねたくも人にひく心かな

久戀

あかざりしおもかげとめて夕顔の露わすれずもぬるゝ袖かな

白地戀

あふことになさばさもこそありあけの曉いでゝ見る程もなし

恨戀

何とかくなげのなさけもなかるらむ恨は人のあはぬのみかは

絶戀

立歸りまた渡らむもいさや川たれせきとめて逢ふ瀬絶えけむ

契戀

かはるなといくたび人にちぎるらむ身の行末は我もしらじを

祈戀

戀せじのみそぎを神のうけざらば思ふすぢをや猶いのらまし

僞戀

笛の音による行く鹿もいつはりのある世悲しきもの思ふらむ

變戀

あらずなる人のこゝろに草も木も霜おきてこそ色かはりぬれ

寄衣雜

うきねするたみのゝ島のあま衣ぬれずばかゝる月を見ましや

寄枕雜

友なくてひとりぬる夜の手枕はあけぬものとや思ひのどめむ

寄葦雑

花ならぬこゝろの上にかけて見ばさける草木も色やなからむ

寄市雑

市人のかへりすみぬるしかま川たちつるなみや猶さわぐらむ

寄舟雑

いかにこしよるの舟路ぞ波風のなごりは今朝も猶ぞはげしき

寄橋雑

名ばかりはながらの橋と殘る世に我が身ふりぬる類もぞなき

寄鐘雑

鐘の聲にわけこし峰を見わたせば我が跡とめて月はいでけり

寄木雑

秋ごとに草のかづらの朽ちぬるもあはれいくよの霜の松が枝

寄苔雑

朽ちのこる苔の埋木あはれまたいつをしのぶの草と生ひけむ

寄水雑

あだに散る露ともいかで石清水結ぶ手ごとに千代をかぞへて

〔以上後奈良院御百首〕

第一

立春

出づる日にむかふ神路の山たかく雲居もおなじ春や立つらむ

盧橘

うつし植ゑしたが軒端より橘のむかしをしのぶ香に匂ふらむ

女郎花

風わたる霧のまがきの女郎花へだつと見るもなびくいろかな

霜

おきそふも空にぞしるき初霜の殘る夜ふかきかねのひゞきに

霰

ふる音はまなく聞えて一村はたがたまざゝのたまあられかな

爐火

さえ〳〵て松のあらしの更くる夜もよそにしらでや向ふ埋火

恨

今更に身をこそたどれなにゆゑと人にはるけむ恨みどころも

田家

もりすてし跡とも見えずかりいほに遠山がつの殘すかよひぢ

述懷

いやつぎに神もぞ守る天地もうごきなき世のときを待ちえて

第二

初鶯

さえかへり雪もふるえの梅の花まづひらきたるうぐひすの聲

谷鶯

さきさかぬいづこの谷のうぐひすも花の都といひて鳴くらむ

尋若菜

いざゆかむめぐむ若菜はそことしもまだしら雪の春日野の原

餘寒嵐

さえかへり吹き盡してよ咲かぬまの花にはきかむ嵐なりとも

梅有遅速

咲く梅のおなじ枝ながら吹きかへて朝露さむき北のやまかぜ

草庵春雨

ころは春たれかは草の庵しめてしづけき雨のかぎりをも知る

歸鴈幽

したはれて春にこゝろはひく琴の音に通ひて□鴈かへるらむ

馴花

年をへて色にやそめし唐ごろもなれにしほどの花の木のもと

落花似雪

さえかへる程とや見らむ木のもとに又ふりつもる花の深雪は

河邊款冬

花とみてせくや吉野の川水にえもゆふばえの八重のやまぶき

暮春藤

行く春にしばし手折らむ藤波にこえたる花のえだはあらじを

惜三月盡

かねてよりやよひの春の限りとは聞きしにまさる鐘の聲かな

第三

翫花

春いくか今日諸人の逢ひにあひて花もかざしの色香をぞ思ふ

暮春

くれてゆく春しもあやし菅の根の長き日いかでいかに過ぎけむ

待郭公

初聲はしのびもあへじゆふやみの月待ちてとや山ほとゝぎす

聞郭公

待ちし夜のうらみをつくす時鳥きくもなごりのいねがての空

萩露

おく露の匂ひにあまる枝も葉ももとあらの小萩花に咲きぬる

河紅葉

河音はよるのまくらによるの雨あすの紅葉のいくしほか見む

淺雪

古き世のあとかはらずば初雪のあさきもふかきこゝのへの庭

潟千鳥

あかつきの潮の干潟のしらむより千鳥も波にわかれてや立つ

寄衣戀

よしさらば夢にはなさじうらもなくよるの衣を今はたのまむ

浦船

うきわざと思ひながらに行き歸る浪もしかまのうらのつり舟

岸苔

むす苔のちりもはらはじ庭きよみうごかぬ岸の水のみどりに

第四

松殘雪

春さむみしばしは雪のうち散るも下葉にまじる軒のまつかぜ

春月

春はたゞかすみぞわきてうきぐもは風をぞ待ちし秋の夜の月

挿頭葵

あふひ草月のかつらの枝そへて今や手にとるかざしにはせむ

初聞鴈

秋になる今はたきつゝ鴈がねはいなばの風やおとづれやせし

川霧

さす舟の袖より立ちてうすくこく川瀬うつろふなみのうき霧

冬月

空きよくあたりの雲を吹きなしてあらしのうへにさゆる月影

寄岡戀

またもこむ名殘をとめて初霜のねてのあさけのをかごえの道

寄池戀

かくながら浮名なりとも池水にいひ出でゝだに□もらさなむ

谷松年久

年たかくかたぶくまつに仙人の名をやとゞめし谷のかげぐさ

寄夢述懷

いさむるもありしながらにたらちねの幾たび夢の昔をか見し

第五

子日

立出づる野邊もはるけき小松原引く手あまたの春や見ゆらむ

歸鴈

かへるさの道にといそぐ一つらはおくれぬかりの峰のしら雲

暮春

やよひ山そこともわかずくれて行く霞ぞしるべ春やしたはむ

叢螢

草の葉の露もみだれて光ありと見えて涼しく飛ぶほたるかな

見月

知らじかし千尋の底にふかめても月の見るめにおよぶ物かは

冬曉

霜こほりかさなる夜半のおもほえず寢覺になりぬ有明のそら

待戀

ねたしとは思はじいはじ住吉のまつてふ色のかはりやはする

恨戀

はるけてもまたいかならむことわりのほかにわりなき恨所は

浦鶴

難波潟つのぐむ蘆邊はる〳〵としほひ知らるゝあしたづの聲

磯波

あしかりし名殘もなみの磯づたひまた漕ぎよせてあかぬ友船

第六

山早春

のどかなる春に千里の外はあらじいくへの山もわがやまと國

隣家梅

軒ちかき梅吹きちらす笛ならばふるきをおもふ聲はやめてよ

岡春曙

後奈良天皇

あけぼのゝいつはあれども駒なべて春をぞとはむ岡のべの宿

松隔花

花の香はいづくもれましふかみどり松に立ちそふ朝がすみ哉

杜郭公

ほとゝぎす聞きしはそれか玉鉾の道のゆくての杜のしたかげ

山路蟬

雲かゝる木ずゑのせみのねに立ちてちる露すゞし端山しげ山

晩夏螢

よな〳〵に光もうすく行くほたるつゝむたもとにちかき秋風

初秋風

吹く音もさしてそれとは白雲のゆふべのそらや秋のはつかぜ

初秋荻

しら露もまだおきあへぬ荻の葉にまづおとづるゝ秋風のこゑ

初秋萩

いとはやも花もてはやす萩の戸のあくるひかりは露のしら玉

初秋薄

秋も今はつ花すゝき吹く風になびくすゑ野のつゆみだるらむ

紅葉山錦

七夕の手にもまさりて山姫やいろなるあきのにしき織るらむ

紅葉秋深

山姫の染めしはふかきもみぢ葉におよぶ色なき常磐木のかげ

蘆洲氷

後奈良天皇

淺き瀬のしらすにたてる蘆づゝの一よ二よにかつこほりつゝ

第七

七夕月

このゆふべ待ちつけがほの逢ふ瀬にや月もいざよふ天の川波

草花未遍

百草におもひもかへじ秋の花かつ咲くころのいろの千しほは

月前草花

ゆたかなる草のたもとは秋の風立ちてゐて見む花のちぐさを

田家秋夕

夕つゆの外面にひろき千町田のをしねいろづく秋やさびしき

古寺秋夕

小初瀬や峰のひばらの秋のいろ霧にふかむるいりあひのこゑ

鹿聲幽

山とほく月さしのぼり空澄みて牡鹿鳴くなり夜もあけぬべし

籬中蟲

はなちけむもとの垣根の庭もせにところもさらぬ松蟲のこゑ

紅葉留人

行きつるゝ紅葉のかげは小車のやすらふ程にこゝろ見えけり

暮秋旅

行く秋もたれごとの葉にとりそへて紅葉も菊も手向にはせむ

第八

初花

後奈良天皇

さきいでしその世もゆかし花ざくら何の色よりうつしそめけむ

湖歸鴈

唐崎や波はふもとのかゞみ山おもかげとめてかへるかりがね

待郭公

さのみやはしのびはつべき時鳥むらさめ晴るゝ月のゆふべに

樹陰照射

ともしさすほかげぞしたひつくば山しるきが中もあくる短夜

關月

月ふくる身をばいかにと鈴鹿山こえてうれしき關路なりけむ

擣衣

たが里もまぎれぬ夜半の寐覺かな秋の聲とはひゞくきぬたに

瀧落葉

散りくるや水の木の葉も岩そゝぐ瀧のしら絲そめかへすらむ

杣寒月

あはれその名さへ朽木のそまやまや霜夜の月は見る人もなし

片戀

人よいかに見えぬ心の程ばかりしたふつらさのくらべ苦しき

寄舟雜

末つひに思ひよるべをさだめおきて浪にさはらぬとほつ舟人

寄苔雜

君が世は千世ぞと見えてうごきなきいはほの苔も緑そふらむ

第九

殘雪

みやま木の花とやみましなべて世の春のかたへにのこる白雪

暮春

くれにけり聞きしも見しも蝶鳥のうつるしらべの春の名殘は

聞郭公

ほと〻ぎすさだかに啼きて時しもあれ一夜を千夜の曙のそら

故郷橘

吹き傳へ風の□のみぎりには花たちばなのまづ薫るらむ

女郎花

しるといへば枕はゆかし女郎花たがためならぬ露にこそあれ

夜鹿

妻こふる鹿のおもひに秋ぞなほまさきのつなの夜やわびしき

山月

月おそき心いられはちりひぢのいつのふもとの山の端のくも

野月

うつろはむ花さく野邊の草のうへの露に夜かれずやどる月影

朝霜

ゆきかよふ人よりさきにおき出づる鳥の跡のみふかき霜かな

水鳥

毛をかふるつばさの霜に夏がりのあしまを思ふをし鴨のこゑ

寄雨戀

ほしやらでよしや見せばや契だにあらば逢ふ夜のそでの村雨

後奈良天皇

海路

かぎりなき青海原のなみのうへ雲もひとつの海士のつりぶね

祝言

雲居より雲居になるゝ老の鶴はおなじ千年のこゑきこゆなり

第十

子日

子日して友とは今日を二葉よりひかでぞ松の千世はかぞへむ

津梅

梅が香のいづくはあれど難波津や名におふ花の春のひとしほ

卯花

月雪のひかりに夏のすゞしさのいろにはあらで咲ける卯の花

砌橘

たちばなのかげふむ道に散る花の色香は深きみどりともなき

氷室

岩たゝみせき入れし水の氷室山ふゆをもらさぬ松かぜぞ吹く

路薄

道のべや穂に出づるころは行く袖もまじる尾花のつゆの秋風

暁露

誰がうへもはらひつくして明方の秋のおもひの露はのこらじ

落葉

しげりつる木末はいづく木がらしに落葉みだれておける朝霜

寒月

・うば玉の夜わたる月は空の海やこほりをしきてかげぞ流るゝ

見戀

いかさまの限しらせよ間近くもさすがに見るはつらき物から

會戀

いかでかは新手枕のくろがみのあらぬ思ひのむすぼゝるらむ

述懐

神代よりたのみこし身のうけつぎて敷は百枝の松もむつまじ

祝言

雲の上のひかりもさらず天照す神のちかひの千世もかはらじ

〔以上天文十一年二月大神宮御法樂千首〕

天文三年閏正月雪のふりける日三條入道「初春のく

はゝる名のみ世にふりて花待ちどほの木々の雪か

な」とよみて奉りけるに御かへし

雪にけさ花をおもへば初春のくはゝるいろぞえだにこもれる

〔池の藻屑〕

正親町天皇

立春

きのふまで雪にみなれし山の端も霞にあけてはるや立つらむ

朝霞

いづくぞと四方のこずゑもしら衣たちかさなれるあさ霞かな

谷鶯

谷の戸をみやこに出づるうぐひすの聲にも春の色やそふらむ

殘雪

さえかへり風にやこほる山かげはつれなくのこるこぞの白雪

若菜

朝霜もまだ消えあへぬ春の野の若菜つみにとたれいそぐらむ

里梅

日にそへてなほ咲きこるや梅が枝のにほひにふかき春の山里

簷梅

春風に軒端の梅やさそふらむしばしはにほふうたゝねのゆめ

春月

ところがらかはるともなし春の夜はあかしの浦もくもる月影

春曉

たぐひなき名にたつ春のあかつきや波間もかすむ住吉のはま

歸鴈

かりがねの歸るさ急ぐ越路にはみやこにまさる花や咲くらむ

春雨

降りつゞきはれまもなくて永き日に猶暮れやらぬ春雨のころ

岸柳

さほ姫の春のすがたか河岸にしだりやなぎのたまかづらして

待花

木のもとに待つもつれなき心かな花の下ひもとけぬ日かずは

初花

かつ咲きし櫻が枝や見るがうちになほかすまざる花の色かな

見花

行く人にゆきおくれてむ今日もまたみやまざくらの春の夕暮

花盛

こずゑまで咲きものこらぬ花の枝にふくとも風の心あらなむ

落花

吉野山いつはありとも朝ぼらけ花のしらゆきちりつもるころ

歳冬

春ふかき宇治の河島ゆく水におもかげひたすきしのやまぶき

池藤

池ひろみ吹きたつ風もおのづから松のしづ枝にかゝる藤なみ

暮春

越えきつる道もかはらでかへるさも東のせきも春やゆくらむ

更衣

花染の春のころもをぬぎかへしたもとより今日夏はきぬらむ

卯花

雨の夜も月にやまがふみちのくのまがきの道にさける卯の花

待郭公

初聲をまつちの山のほとゝぎす聞きても人にかたらむは惜し

關時鳥

時鳥しづのをだまきいかにせばくりかへし鳴く聲に聞かなむ

郭公稀

一こゑをなごりになして横雲にあかでわかるゝ山ほとゝぎす

古郷橘

古里は住む人もなし袖の香をはなたちばなにたれのこさまし

早苗

うらわかき早苗の末葉うちなびきとる手にいそげ小田の夕暮

五月雨

さみだれに瀬たゑし川も淵なれや舟よばひする水のゆくすゑ

鵜川

月影に鵜舟のかゞり消えやらで波間こぎいづる夕ぐれのそら

叢螢

しげりそふ草の葉がくれ飛ぶ螢露にひかりのみだれてぞ行く

夏草

まがきより咲きこぼれてや白露もおきどころなきなでしこの花

夏月

山の端にいづるも入るも程もなくはやあけがたの空の月かげ

夕立

なるかみのたゞひとゝほり一さとの風もすゞしき夕立のあと

杜蟬

夏の日のこゑのうちにや秋近きせみの羽うすきころもでの杜

夏祓

河水に七瀬よりくるみなづきのめぐみあまたのぬさのおひ風

早秋

正親町天皇

いづれにかさだめて聞かむ今日よりの草木がうへの秋の初風

七夕

せめてさは夜を長月にちぎれかしほどなくあくる星合のそら

荻風

荻の風まくらにちかしおとづれてなほ寝覚する秋の夜半かな

萩露

白露ににしきのひもをとく花のみだれてにほふ眞野のむら萩

女郎花

あだし野のあだなる露の秋のいろに風のまゝなる女郎花かな

夕蟲

色かはる風もあらしのあさぢふの蟲の音しげる秋のゆふぐれ

夜鹿

さしのぼる月も隈なき秋の野をおのがたちどと鹿や鳴くらむ

初鴈

海山やこしぢほどなきそらの雲いく行きすぎぬはつ鴈のこゑ

秋夕

それとなくすゞろに物のかなしきは色かはりゆく秋の夕ぐれ

山月

ふけにけり山のはつかに影そひて雲をばよそに月や出ぬらむ

野月

しばし猶こゝろして吹け月やどる露はこぼさじ野邊の秋かぜ

河月

くもりなく照りそふ月のかつら川名に流れたる影のさやけさ

江月

ながき夜の有明までもあかざりし名殘をいまやみしま江の月

浦月

くれかゝる波より月や出でぬらむ底もくもらぬ秋のうなばら

籬菊

咲きあまるまがきの菊の花の上ににほ□るゝ秋のしら露

擣衣

きぬたうつぬしは誰とも知らねども月に寢覺の友となるらむ

曉霧

霧ふかき淀の川瀬のあけぼのや春のかすみもおもひ出づらむ

岡紅葉

露しぐれ染めおくかたやまさるらむ夕日色こき岡のもみぢ葉

庭紅葉

秋はみな一木が上ものこりなくうつろひかはる軒のもみぢ葉

九月盡

惜しみてもなにかはひとつあだならぬ今宵ばかりの秋の夕暮

初冬

花に見し千種も淋し枯れてゆく野邊のけしきに冬は來にけり

時雨

秋にやはかはらぬ雲のゆふしぐれさすがに空の冬ごもりして

落葉

もみぢ葉のみな散りはてゝ後にさへ又木のもとにいとふ山風

朝霜

いとふかく置くとはすれど朝霜のさすが日影に消えは殘らじ

寒草

庭の面に殘る□さびし冬草のかれだにはてぬかげのさむけさ

千鳥

沖つ風しほみちくるやむら千鳥たちさわぐ聲の浦づたひ行く

水鳥

うきねしてつがはぬ鴛の思ひより上毛の霜のひとり消えぬる

氷始結

山おろしはげしく吹きて谷川もこほりにむせぶ水のしらなみ

冬日

ふる雪の空には晴れて冬の夜の月のひかりやつもりそふらむ

鷹狩

狩人のとだち落草わけやらでゆくへもしらず野邊にくらしつ

野霰

分けて行くそでにたまらぬ玉霰落ちても野邊の草葉にや散る

殘雪

都にはあさきといはむほどもなし深山のおくの雪のこゝろを

積雪

山よりもなほ山たかし降りかくす松のこずゑや峰のしらゆき

閑中雪

友を待つ雪をば雪もおもふらむ降りぬるやどやとふ人もなし(きイ)

歳暮

花の春月の秋にぞめぐりあはむくれゆく年のをしきものから

寄月戀

なかむればなほうきことやまさるらむ袖の涙にやどる月かげ

寄雲戀

晴間なくそなたの空もかゝるらむ空にみだれてもの思ふころ

寄露戀

思ひあまる袖の泪を君があたり見つゝ草葉のつゆとおかなむ

寄雨戀

待ちわびし心もしらで夕ぐれのまたかきくもり雨になりゆく

寄風戀

身にぞしむ戀のつまなる秋風のたよりにちりし言の葉のすゑ

寄山戀

しぐれしてうつろひやせむ秋の色も青葉の山も人のこゝろも

寄關戀

いかにしてしげき人めのおのづから忍ぶる中に關となりなむ

寄海戀

もの思ふ袖の中にも海はあれどみるめかるべき舟だにもなし

寄原戀

袖の上のなみだ□はるあさぢはら露おきそふる夕ぐれの空

寄橋戀

さめてこそ猶こひわたれ逢ひ見てもする絶えぬべき夢の浮橋

寄木戀

やどり木のねもみぬものゝ假初も契とならばなき名だにたて

寄草戀

いかにせむ磯がくれかく藻汐草よりくる波にもれて見えねば

寄鳥戀

ありあけの月にうかれて初鳥のまだきになくやきぬ〴〵の空

寄蟲戀

知るやいかに藻にすむ蟲にあらねどもわれから濡るゝ我袂哉

寄獸戀

なか〳〵に待つ人もなき夕暮はやすくふすゐの床のひとりね

寄玉戀

つらかりしことのはごとに消えやらで涙の露や玉と散るらむ

寄鏡戀

うき人のこゝろの裏は見てもうしかげもみなれぬ鏡なりとも

寄枕戀

みとせをば待ちわびぬとも新枕またいまさらにいかで定めむ

寄衣戀

朽ちまさる袖やしのぶのすり衣かぎりもしらぬ露のみだれに

寄絲戀

戀路よりまづみだれたる心かと絲にはあらぬ我が身なれども

浦松

浦とほく潮やみつらむ波間よりこずゑすくなき松のむら〳〵

窓竹

さびしさの友とやならむ寝覺するまくらにさやぐ窓のくれ竹

山家嵐

山人のたきゞこりつゝかへるさを嵐ぞおくるゆふぐれのそら

田家

秋の田の色づくころのかり庵をしづが家口に住みやなすらむ

故郷

わするなよみしにもあらぬ古里もかはらぬ友は月のかげかな

海路

とまりせばいづくともなく舟人の風にまかせて波路ゆくらむ

羇旅

たびごろもたちし都をへだてつゝ峰こえてまた山ぞかさなる

述懐

うき世とて誰をかこたむ我さへや心のまゝにあらぬ身なれば

神祇

君が代はちとせをかけて松の尾の神のめぐみも猶やそふらむ

祝言

なにの道もまさきのかづら末つひにたえずつたへよ家々の風

〔以上正親町院御百首〕

天正十六年四月内のうへ聚樂第に行幸ありける日

御短册にかきて關白の許へおくらせ給ひける

萬代にまたやほよろづ重ねてもなほかぎりなき時はこのとき

同じとき還幸の後關白より內に奏したりける歌ど

もきこしめして

うづもれし道もたゞしき折にあひて玉の光の世にくもりなき

【以上聚樂行幸記】

後陽成天皇

蟲

初霜にうらみはてたる蟲の聲おきそふまでに絶えじとやする

月

雲の上のむかしにあらぬ影見ても我が身ひとつの秋の夜の月

戀

ほのかなる軒端の荻を吹く風のおとに聞きても露ぞこぼるゝ

【以上文祿三年八月後陽成院御歌合】

春

立春朝

さほひめのかすみの衣たちかへる春とはしるき朝ぼらけかな

江霞

難波江やおとものどかに浪の上のかすみをくゞるあまの釣舟

雪中鶯

聲はまだ雪のふるえの梅が枝になれてもうときうぐひすの聲

山家鶯

山里は春さへのこるあさぎりにむすぼゝれたるうぐひすの聲

餘寒月

大空は去年のあらしやのこるらむ見るかげさむき春の夜の月

柳露

春風はさもこそあらめ朝な〳〵つゆにもひなくあをやぎの絲

池柳

春ごとに柳のかみもみだれてやうつろふ池のかゞみなるらむ

岸柳

西ひがし川邊の水に春のいろのいたりいたらぬ岸のあをやぎ

江春月

たをやかに舟漕ぎとめて三島江や浪にかすめるありあけの月

歸鴈幽

雲にまづつばさは消えてかへる鴈殘るも聲やかすみゆくらむ

杜花

春ごとにしのだの森のさくら花千枝に咲きそふ色としもがな

花鏡

池水も花にこゝろやうつすらむかゞみとなりて影をやどせば

山田苗代

山水をこゝろのまゝにせき入れてつくるやしづが小田の苗代

川款冬

大井川ゐぜきの波のやまぶきの花いろごろもかけてほすなり

三月盡夕

後陽成天皇

暮れてゆく春の餘波もけふのみとなほしたはるゝ入相のかね

閏三月盡

花鳥の色音にあかで惜しむかな後のやよひのけふのわかれを

夏

朝更衣

昨日暮れし春の名殘の今朝をだにしばしはかへぬ衣ともがな

更衣惜春

花染に染めしころもをたちかへて惜しむかひなき春の色かな

餘花

木がくれを知らでや風の殘すらむ若葉のなかにまじるひと花

早苗多

さなへとる伏見の小田の遠近のみどりにつゞく水のすゞしさ

樗

花さけるあふちのこずゑ雨過ぎて雲ゐるのきに風かをるなり

古宅五月雨

五月雨のふるき軒端は朽ちそひて音こそたえね露もしづくも

秋

七夕衣

わかれ行く星の契ぞあはれなる秋さりごろもころもへずして

曉蟲

明方のあきの寢覺をことゝひてなみだもよほす蟲のこゑ〳〵

海邊鹿

後陽成天皇

淡路潟なれも身にしむこゝろとやかたぶく月に牡鹿鳴くらむ

田鹿

なれて聞く田づらの庵はもる人のあはれ知らるゝ小男鹿の聲

田鳴

なが き夜も明けむとするに小山田の鳴のはねがきかぞふ枕は

駒迎

逢坂の山立ちいでむきりはらの駒うちわたす瀬田のながはし

夕月

なかぞらに光やおはむゆふぐれはまだほのかなる山の端の月

渡月

一ふしを月にうたひて友ぶねの由良の戸わたる聲きこゆなり

庭月

とふ人を松のとぼそになが めわびぬ月の雪には跡も惜しまで

行路紅葉

み山路に手折るもみぢの錦きて花のみやこにかへるもろびと

岸紅葉

みむろ山岸根の紅葉散りにけりあらしや秋をさそひゆくらむ

古寺紅葉

紅葉するとよらの寺のいりあひのこゑも色あるかつらぎの山

冬

野時雨

夕しぐれ間なく矢田野に過ぎにけり明日やあらちの嶺の初雪

里時雨

山の端にしぐるゝ雲のかさなりて里はをぐらの名こそ隠れね

屋上霰

夢絶えてあられたばしる風の音にこゝろくだくる閨の寒けさ

戀

寄晝戀

かけおきし契もつらし朝露のひるますぐらむいのち知らねば

寄夕戀

かたみともおもほえなくにこし時のゆふべの雲ぞ面影に立つ

寄濱戀

さてもかくつらき心をみつの濱に拾ふかひなき身をいかにせむ

寄渚戀

こりずまに思ふなぎさは磯馴松なれなば又も名にや立つらむ

寄社頭戀

忘るなよ神のやしろのゆふだすきかけて誓ひし末とおもはゞ

寄門戀

忍ぶとも人なとゞめそ妹が門たよりにうたふなかとおもはゞ

寄戸戀

治まれる世とやこたへむ人とはゞ槇の戸さゝで下待ちし夜は

寄淺茅戀

人の秋にあはざらましを命だにあさぢがすゑの露と消えなむ

寄苔戀

後陽成天皇

賴みつゝとひけむ人は松が根や苔おふるまでなりにけるかな

寄鴈戀

名にしおふ鴈のつかひにことづてむ我玉章をかけてかよへと

寄裳戀

こぬくれも松浦の川にわかゆ釣るもすそより猶ぬるゝ袖かな

寄祓麻戀

大ぬさのとる手に祈る末つひにしるしあらはせ神のもろふし

寄帆戀

たよりある風を待ちえて行く舟の眞帆にあひみむ心ともがな

寄網戀

よそに引く人のこゝろはしら波の立ちさわぐ浦の網のうけ縄

寄釣戀

釣たるゝ舟も浪間のうけ縄のながきおもひに身をうらみつゝ

雜

杜柏

かつちるも葉びろがしはのかげそひて月こそいたく杜の下道

路芝

芝草もなびきあひけりやりはつる吉野のさとは道もなきまで

名所柚

しがらきの柚山人の斧のおとも道も絶えたるゆきのうもれ木

名所濱

いつの間にをのゝ葛葉も霜がれてしほかぜさむき吹上のはま

名所潟

とまりぶね漕ぎはなれゆく難波潟蘆間のよるの名殘をぞ思ふ

羇中里

夢路だに遠ざかりゆくふるさとをしのぶの里の旅寢なかしき

山家夏

おのづから夏をばよそに遣水のこのみなかみやみやまべの里

山家風

聞きなるゝ音とてさすが柴の戸にむすぶ夢ある山かぜのこゑ

山家庵

つれ〴〵を友とや人のしらざらむしばの庵に住めるこゝろは

山家木

すむとても竹の柱ぞみやま木を折りかけ垣のかげのあはれさ

田家雨

ぬれてほす山田の庵も蓑も笠もまだとりあへず雨ぞ降りくる

寄雲無常

しばしよしありと見ながら頼まれぬうき身の上のそらの浮雲

寄星述懐

さとりえぬ心ぞつらきあかつきの星をしるしの法のためしを

寄瀬述懐

おろかなる身はあはれなる名取川瀬々にあるてふ埋木にして

寄山述懐

學びえぬ窓のすゞりはちりひぢの山としなりて歎きこりつゝ

三輪

かず〳〵の道もまよはず神垣はすぎをしるしに三輪の山ざと

如是本末究竟等

もとあらの小萩の花ももろともに末葉の露と散りしいろかな

畜生界

後の世もあはれなるかな里の犬のうてども去らぬ縁なりけり

菩薩界

彼岸へ行くてふ道をしることもげに舟をさのあればなりけり

寄鶴祝

はぶきいでゝ雲居にあそぶ鶴の子は幾千年をか世々に重ねむ

〔以上慶長十年九月禁裏御會千首和歌〕

天正十六年四月聚樂第に行幸ありて寄松祝といへることを講ぜられしついでによませ給ひける

わきてけふ待つかひあれや松が枝の世々の契をかけて見せつゝ

同じとき還幸の後に關白「時を得し玉う光のあらはれてみゆきぞ今日の諸人の袖」「空までも君がみゆきをかけて思ひ雨ふりすさぶ庭の面かな」「みゆき猶思ひしことのあまりあればかへるさ惜しき雲の上人」

とよみて奏しけるに御返し

玉をなほみがくにつけて世にひろくあふぐ光をうつす言の葉

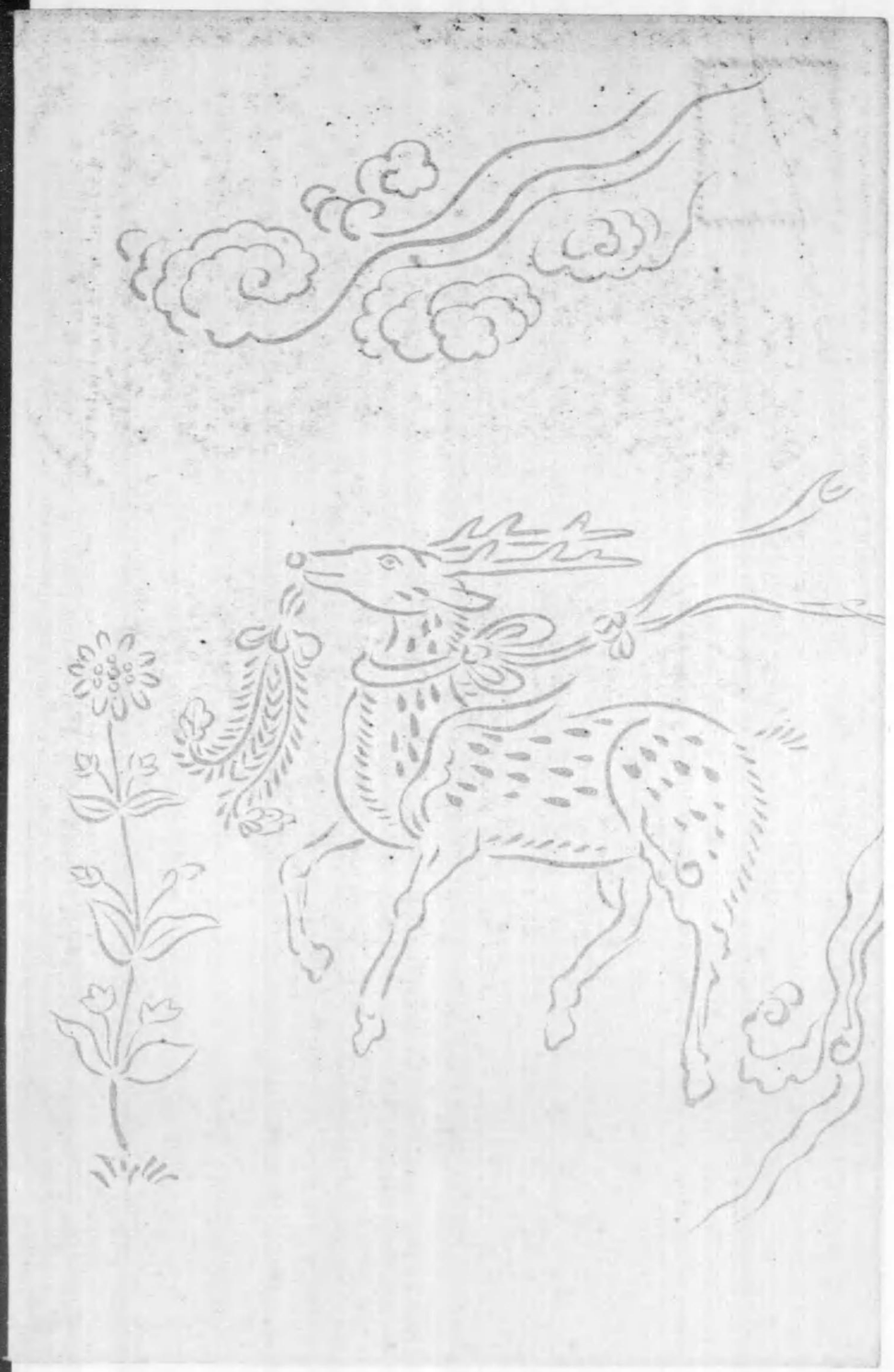
かきくらし降りぬるあめも心あれやはれてつらなる雲の上人

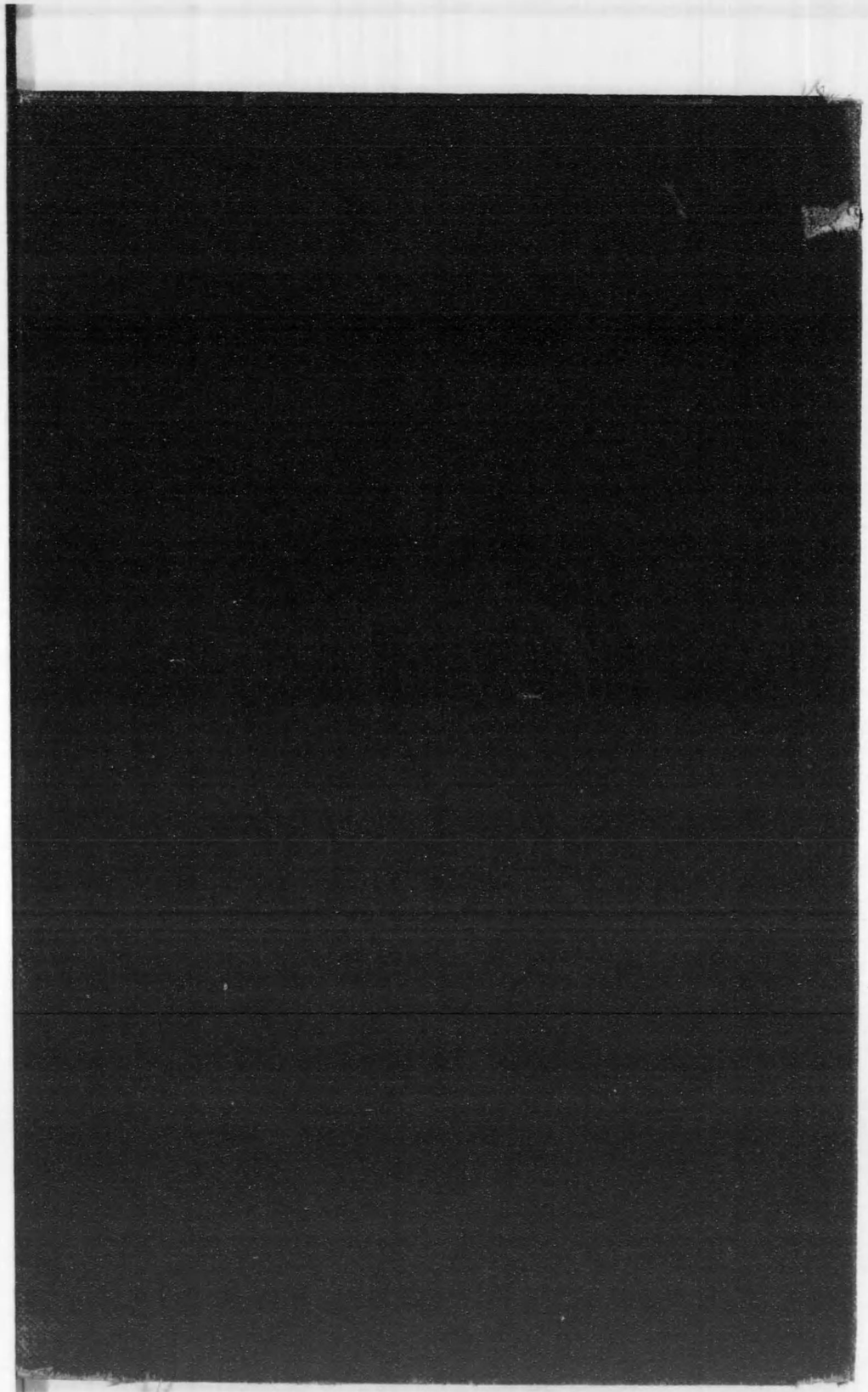
あかざりし心をとむるやどりゆゑ猶かへるさの惜まるゝかな

〔以上聚樂行幸記〕

歷代御製集卷十六 終

328
372





終